

二〇二六年度 田園調布学園大学

全学部全学科専攻 共通

# 国語 入学試験問題

一般選抜（個別試験型） A日程

受験番号

（注意）

- 一、解答は、すべて別紙の「解答用紙」に記入してください。
- 二、受験番号と氏名は、「問題用紙」と「解答用紙」の両方の所定の欄にかならず記入してください。
- 三、「問題用紙」と「解答用紙」は、試験終了後、かならず提出してください。
- 四、「問題用紙」に「下書き」「書き込み」などをしてかまいません。
- 五、試験時間は六〇分です。

氏名

(一) 以下の文章を読んで、後の問いに答えなさい。

ところで空間そのものは等質的である。その等質的な空間を構造化<sup>II</sup>分節化するの人間にはかならない。アリストテレス<sup>〔注〕</sup>は空間の方向性に六つの種類を認めた。A 上と下、前と後ろ、右と左である。「上―下」「前―後」「右―左」という六つの方向性が空間のなかで直立している人間の姿勢から導き出されたものであることは想像に難くないだろう。

この三つの座標軸のなかでは「上―下」が特権的な方向軸であることは注意されてよい。

B 「前―後」「右―左」は視点を移せば逆転するからである。つまり「上―下」は対称的ではなく、固定的だということだ。われわれは逆立ちでもしない限り日常生活で上下が逆転する事態に出会うことはまずない。横になっても俯せになっても上下の方向軸は生きている。「上―下」の方向軸が特権的だと形容したゆえんである。

「上―下」の方向軸の価値づけが文化・時代・地域などを問わず比較的普遍的な様相を示すのもその特権性(固定性)の故だろう。いろいろな意味で「上」はプラスの価値(神・天)を付与され、「下」はマイナスの価値(地獄・黄泉の国)を押しつけられる。これは世界(空間)を把握する中心的aキカン、目(視覚)や耳(聴覚)や頭脳(知力)が身体の上部に集中していることとも無関係ではないだろう。顔や手はむきだしにしても許されるが、下半身(たとえ足でも)を見せることはよくないこととされる。特に昔のヨーロッパでは女性が脚を見せることはタブー視された。だからこそヨーロッパでは脚は性的フェティシズムの対象になるのだろう。

① 「前―後」の方向軸は「上―下」のそれに比べると相対的性格を帯びる。

私の「前」は、私がそちらに背を向ければ「後ろ」になる。また私の「後ろ」にある建物は私と向き合っている人から見れば「前」にある。「前―後」はどこに視点(中心)を設定するかによって変化しうる。しかしひとたび視点が決まれば「前」がプラスの価値を与えられ、「後ろ」がマイナスの価値を帯びることはかなり普遍的な現象である。

「前」は進行方向で見通しがきく。それは明るく開かれた意識的空間であり、可能性を秘めた未来に通じる空間でもある。それは気を許せる空間にほかならない。

C 「後ろ」は無防備な空間だ。道を歩いているとき背後に人の足音を聞くと人は不安になる。その人が誰か分からないからだ。突然なにかをされても身を守るすべがない。映画の剣戟<sup>けんげき</sup>シーンで多勢の悪者に取り巻かれたヒーローが壁を背に――あるいは川を背に――防戦するのは背後の敵を嫌い全員を視野におさめるためだ。

日常生活で後ずさりする事態に遭遇することはまれである。そんな事態は恐ろしいものに遭遇し、恐怖におびえ、振り向いて逃げ出す余裕もないせっぱ詰まった状況下<sup>しゅっぱたい</sup>に出来る。あくまでも例外的な出来事といってよいだろう。

「後ろ」は無意識的で、暗くて、否定的な空間だ。また過ぎ去った過去をも表す。「後ろを振り返る」とは「過去を思う」ことだが、むしろ過去にとらわれるという否定的な含意が感じられる。「後ろ向き」と言えば「発展性のない／消極的な」という意味だ。とにかく後ろを見ることは逆行的な営みであると言えるだろう。

そんなわけで後ろを振り返ることはタブー視されることがある。それを②裏書きする神話がオルフェウスの冥界下りだ。

オルフェウスはニンフのエウリュディケーを妻としたが、彼女がじきに毒蛇に噛まれて死んだため、最愛の妻を取り戻すため地下界に下った。彼は音楽で冥界の王ハデスの心を動かし、妻を地上に連れ帰る許しを得た。D、それには一つの条件があった。地上に戻るまでは決して後ろを振り向かないこと。しかし、オルフェウスは地上にあと一步というところまで来たとき、背後にエウリュディケーの気配が感じられないのに不安を覚えて思わず後ろを振り返ってしまった。そのため永久に妻を喪うことになる…。

「右―左」は「上―下」「前―後」とは少し事情を異にする。「右―左」はややこしい問題をはらんでいる。

「右―左」を定義することは簡単なことのように思えるが、実は意外に骨の折れる仕事なのだ。辞書の「右」のbゴギ説明を見るとそのことがよく分かる。ちなみに手もとにある国語辞典を開いてみよう。

- (1) 「南を向いた時、Eにあたる方」(広辞苑)
- (2) 「Fな位置の一つ。Gを向いた時、南の方、また、この辞典を開いて読む時、偶数ページの側を言う」(岩波国語辞典)
- (3) 「正面を南に向けた時のE側にあたる側。人体を座標軸にしている。人体で通常、心臓のある方とH側」(日本国語大辞典)
- (4) 「アナログ式時計の文字盤に向かった時に、一時から五時までの表示の有る側。「明」という漢字の「I」が書かれている側と一致」(新明解国語辞典)

実をいえば、右あるいは左をJに定義することは不可能なのだ。「東西南北」という固定的な方位に頼るものが多いのはそのためだろう。しかし、方位は客観的であることは確かだが、実感的ではないので、(1)を除いてはもっと具体的な日常的な事例に訴えて説明しているのだろう。それにしても「奇妙な」説明ではある。欧米では方位ではなく、(3)にも見られる心臓の位置に基づく説明が一般的だ(あとで問題にする「心臓」信仰が関係しているのだろうか)。

要するに「右―左」は本質的にFな方向性だということなのだ。「右―左」は話し手を基点とする主観的なものである。その主観性は「前―後」よりも甚だしい。いくつかの例を挙げてみよう。

京都の「右京」「左京」は平安宮から見ての「右―左」である。同じく「左近の桜」「右近の橋」という場合もc玉座から見ての「右―左」。いずれもこちらから見たそれではなくて向こうから見た「右―左」である。

こちらから見ての「右―左」は野球の「右翼」「左翼」だろう。「進歩／保守」を意味する「左翼／右翼」はフランス革命時代の国民公会(注2)で、革命の急進化を支持する勢力とそれに反対する勢力が「議長席から見て」それぞれ左側と右側に位置していたことに由来する言葉だ(社会的に高位の人々が右側を占めていたことに注意)。

またパリの「右岸」「左岸」はセーヌ河の上流から見ての「右―左」である。見られるように「右―左」は主観的である。その主観性は欧米語の「行く―来る」のそれに通

じる。日本語では「行く―来る」は話者を基準に固定している。しかし英語 (go/come) やフランス語 (aller/venir) では話者と目的地の、どちらかに視点・重点を置くかによって「行く」が「来る」になるし「来る」が「行く」になる。このような例は K にも出てくる。問題は視点をどう取るかなのである。

「右―左」は視点の取り方によって変わるので、ほんらい「方向」の指示には向いていないのかもしれない。使用するときには「向かって右」とか「ドアを出て左手」とか「進行方向の右側」とか特別の限定が必要な場合が多い。あまりピンとこない東館とか西門とかいう方位が頻用されるについてはそれなりの理由があったのかとあらためて納得される。

ただ、③おそろく大多数の人にとっては「右―左」の認識は確実に身近なものに感じられるはずだ。L 特別な限定の煩わしさを感じながらも日常的に頻用するのだろう。だから上記のような辞書の説明を読まされると、あまりの仰々しさにびつくりしてしまうことにもなる。それはなぜだろうか。

それはおそろく、人間の体は正中線<sup>(注3)</sup>をはさんで左右相称に見えるけれども厳密にはそうではなくて、右手と左手にも機能上の差があり、人間がその違いを意識しているという事実があるからだろう(たとえば人間の顔も右半分と左半分では微妙な違いがある)。言い換えれば人間には利き腕があるということだ。心臓の位置も多少は関与してくるが、人間の「右―左」認識に決定的な役割を果たしているのは利き腕の存在である。

人類は人種を問わず右利きが圧倒的に多いということが統計的に確かめられている。確かに右利きの人から見ると左利きの人のしぐさがぎこちなく映ることは否めない(もちろん左利きの人から見れば事態は逆だろうが)。英語やフランス語でも「左の」「左利き」は「不器用な/ぎこちない」を含蓄する。多数派が少数派を押し切る。「右」が「正常」(適切・正義と受け止められ「左」は例外(不適切・不法)と切り捨てられる。多数派の印象・意見がいつのまにか通念 d キハン) になってしまふのだ。

ただ見ている限りでは欧米には左利きを無理やり矯正する習慣はないようで、日本に比べて左利きの人を多く見かける。日本人が横並び一線を好み、ほかの人と違うことを嫌うせいもあるだろう。また、その背景には食習慣のマナーの違いが関係しているかもしれない。フォークとナイフは「箸」に比べるとどちらで持っても目に立たない。M 日本人は「右―左」を欧米人よりも強く意識することは事実のようだ。

次に「右―左」の価値づけを見ることにしよう。信頼できる部下を「右腕」という。一番すぐれた人を称して「Nがない」と表現する。これらの言い回しは「右」が肯定的価値を帯びていることをよく証している。それにひきかえ、物事が順調にいかないことを「左前」とか「左向き」という。「左巻き」という偏見に満ちた言葉もある。漢語系では「左遷」という言葉もある。

ただ「尚左」の価値観がないかといえそうでもない。古代の日本では中国の影響もあるが、「左」の方が尊ばれていた。その証拠には「左大臣」の方が「右大臣」より位が高かった。中国にも時代により④消長はあったが、「尚左」の伝統があった。また「左」をよしとする部族があることを伝える文化人類学的報告もある。

「右―左」は形態的にもほぼ対称のため価値の二元性(プラス/マイナス)がどうしても曖昧になる。「上―下」と「前―後」のようにはつきり対立する対概念ではない。時代により文化により「右―左」のシンボリズムに多少の変動があるのはそのことの反映だが、e 大勢としては「右優位」

である。ただ日本の左利きに対する偏見はかなり特異な事例だと言って差し支えないだろう。

(野内良三『レトリックと認識』より)

注

- 1 古代ギリシアの哲学者(前384〜前322年)。
- 2 フランス革命の際、1792年から95年まで開かれた議会。
- 3 生物体の前・背面の中央を縦にまっすぐ通る線。

問一 二重傍線部 a ～ e について、漢字はその読みをひらがなで答え、カタカナは漢字に改め、楷書で正確に書きなさい。

問二 傍線部②「裏書きする」、④「消長はあった」について、本文中の意味として最も適当なもの、次の中からそれぞれ一つずつ選び、記号で答えなさい。

- ア たとえ話として示す  
イ 論拠にして成り立つ  
ウ 過去の文献で示す  
エ 詳しく補足する  
オ 確かであると証明する
- ② 裏書きする

- ア その傾向が失われてしまうことはあった  
イ その傾向が長引くことがあった  
ウ その傾向が強くなったり、弱くなったりした  
エ その傾向には賛否両論あった  
オ その傾向には批判がなされた
- ④ 消長はあった

問三 空欄 A・B・C・D・L・M に入る最も適当な表現を、次の中からそれぞれ一つずつ選び、記号で答えなさい。

- ア ただし イ では ウ とにかく エ むしろ オ たとえ  
カ それにひきかえ キ なぜなら ク すなわち ケ だからこそ



問七 傍線部③「おそらく大多数の人にとっては「右―左」の認識は確実で身近なものに感じられるはずだ」とあるが、それはなぜか。その説明として最も適当なものを、次の中から選び、記号で答えなさい。

- ア 「右―左」は視点の取り方によって変わり、本来「方向」の指示に向いていないから。
- イ 「向かって右」など、特別な限定の煩わしさを感じながらも日常的に頻用するから。
- ウ 辞書の説明を読まされると、あまりの仰々しさにびっくりしてしまっことにもなるから。
- エ 人間の体は正中線をはさんで左右相称に見えるけれども厳密にはそうではないから。
- オ 右手と左手にも機能上の差があり、人間がその違いを意識しているという事実があるから。

問八 空欄Nに入る最も適当な表現を、平仮名と漢字を用いて五文字で書きなさい。

問九 「上―下」・「前―後」・「右―左」の方向軸の価値づけについての説明として最も適当なもの、次の中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア 「上」・「前」・「右」にはプラスの価値を、「下」・「後」・「左」にはマイナスの価値を見出すことが普遍的様相を示しているのは、空間の方向性が直立する人間の姿勢から導き出されたことによる。

イ 右利きが圧倒的に多いということから、「右」を「正常」と見なし、「右」にプラスの価値を見出す文化が生まれたため、左利きは不適切と見なされ、かつては左利きを無理やり矯正しようとする傾向が多かった。

ウ 「上」は神や天の世界、「前」は明るく開かれた意識的空間、気を許せる空間といったプラスの価値を付与されているが、「右」は「右岸」「右近の橋」などの表現から、プラスマイナスの価値づけはなされていない。

エ 「右腕」「左前」などの言い回しから、「右」が肯定的価値を帯びていることが示されているが、「左大臣」の方が「右大臣」より位が高かったという歴史的事実もあり、「右―左」の価値づけは揺れるところがある。

オ 「上―下」や「前―後」の方向軸の価値づけは限定的であるが、「右―左」の方向軸は時代によっては右に肯定的価値を見出す場合と左に肯定的価値を見出す場合があり、時代によって異なっている。

問十 本文の内容として最も適当なものを、次の中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア 等質的な空間を構造化するにあたり、「上―下」「前―後」「右―左」の三つの座標軸が最も普遍的な分節化であるとして、その理由を各々の方向軸の価値づけが文化・時代・地域を問わない普遍的様相を示す点から説明している。

イ 空間を捉えるにあたり、アリストテレスが認めた「上―下」「前―後」「右―左」の三つの座標軸について、各々の特徴を視点の設定という観点から比較的に説明し、さらにそれぞれの方向軸の価値づけについて具体例を交えて分析している。

ウ 空間の方向性として認められている「上―下」「前―後」「右―左」の三つの座標軸について、各々の性格や序列を比較的に解説し、特に「右―左」の方向軸の特異性を取り上げ、日本人がもつ左利きへの偏見を問題視している。

エ 空間の六つの方向性が直立した人間の姿勢から導き出されたことから、「上―下」「前―後」「右―左」の三つの座標軸の性質を人間の視点の違いによって説明し、また六種類の方向軸の価値づけも身体と関係づけて序列化している。

オ 空間を捉えるにあたって認められた「上―下」「前―後」「右―左」の三つの座標軸について、「上―下」の重要性、「前―後」の相対性、「左―右」の主観性を明らかにし、六種類の方向がもつ価値の二元性を国民性から分析している。

(二) 次の文章は、井上靖「幼き日のこと」の一節である。以下の文章を読んで、後の問いに答えなさい。

私は小学校へ上がる前に一度と、小学校へ上がってから一度と、併せて二回、当時父の任地であった豊橋へ、祖母に連れられて出向いて行ったことがある。

小学校へ上がってからのことはかなりはつきり憶えているが、最初の時のことは断片的な記憶があるだけだ。断片的ではあるが、最初の時の方が印象は痛烈である。どこかに容易ならぬ旅に出で立って行ったような、そんな思いがある。現在正確にその時期を確かめることはできないが、いよいよ小学校へ上がる時が近付いたので、私の身柄がおかのお婆さんの許から豊橋の両親の許へ移されることになり、そんなことから、祖母は私を連れて豊橋へ出掛けて行ったのではないかと思う。

しかし、結局のところ、私は豊橋の小学校へは上がらず、郷里(注1)の小学校へ上がるようになったのであるから、豊橋には出向いて行っただけで、再び祖母と共に無事に郷里の村に舞い戻ることができたということになる。豊橋において、いかなることがあったか知らないが、父も、母も、私を自分の手許から小学校へ通わすことは諦めなければならなかったであろう。

私は父からも、母からも、この最初の豊橋行き事情についても、その成行きについても聞いたことはない。両親にとつても余り気持のいいことではなかったかも知れない。おかのお婆さんは両親の厳命 a コバみ難く、私を連れて豊橋まで出向いて行きはしたが、①八方手をつくして陳情し、ついにそれに成功して、私を手離さなすんだといったところであろうと思う。豊橋では、私はおかのお婆さんの膝(注2)にびたりと寄り添って坐って、父や母が何を言っても、いつでも

②首を横に振っていたに違いないのである。そうした私は、両親には自分の子供ながら、さぞ小憎らしく映ったことであろうと思う。

いずれにせよ、この最初の豊橋行きは、おかのお婆さんと私にとっては、容易ならぬ旅であったことだけは確かである。おかのお婆さんにとっては、必死な陳情の旅であり、私にとっては、自分の一生の運命にかかわる不安と焦燥(注3)に彩られた旅だったのである。謂ってみれば、罪を得

て、豊橋まで出向いて行き、陳情これ努め、漸く許(注4)されて自刃(注5)を免れ、再び踏むことができようとは思わなかった郷里の地に無事に舞い戻ることができたといった恰好である。私と祖母との共同生活に於ては、今考えると、この時が一番の危機であったようである。

しかし、私はこの旅については殆ど憶えていない。何となく慌しく、淋しい旅であったような思いが、幾つかの断片的な思い出の中に仕舞われている。人生というものの持つ哀歎への、幼い私の最初の触れ合いということになるのか。

この小学校へ上がる前の豊橋行きは、もの心がついてからの私の最初の旅であった。集落の入口には日に何回か馬車の発着する駐車場があったが、私は祖母と二人で、そこから馬車に乗って遠い旅に立って行ったのである。その頃、私には遠い、近いは判らなかつたが、③祖母にとつてはやはり遠い旅であったに違いない。野越え、山越えして、遠い他国に旅立って行く思いに揺られていたことであろうと思われる。

駐車場と言えば、駐車場について一つの記憶を持っている。私は誰かに連れられて村の駐車場

に行き、そこから発って行く馬車を見送ったことがある。駐車場と言っても特別な建物があるわけではなく、街道に沿って馬車一台がはいるぐらいの小さい広場があり、その広場の奥に馬小屋があるだけである。馬車も普通は六人乗り、むりに詰めるともう二人ぐらいはcシユウヨウできるといった程度の大きさだった。

とにかく、誰か知人がそうした馬車に乗って集落から出て行くのを、私は見送りに行ったのである。私の記憶の中では、駐車場の広場はコスモスでもいっぱい咲き乱れている秋の感じで、私はそうした広場に立って、馬車を取り巻いている人たちをd眺めている。その時は、自分が見送りに来た人が馬車に乗り込まないことを念願していた。乗らない方がいい、乗らない方がいい、私は口には出さなかったが、そんな思いをひと固まりになって乗客の方に投げかけていた。なぜ乗らない方がいいか判らないが、とにかく私はそんな気持ちに揺られていたのである。しかし、私の気持ちを無視して、相手は他の乗客たちといっしょに馬車に乗り込み、そして馬車によってどこかに運び去られて行ってしまったのである。

今にして思うと、その時私の心を占めていたものは、駐車場というところの持つ離合集散の淋しさではなかったか。中学生時代に駅に行くと、いつも人々が集り散って行く駅の混雑に感傷的な思いを誘われたが、そうした思いの最初のものが、幼い私の駐車場の記憶の中にあるような気がする。

秋であったか、冬であったか、とにかく、私は祖母と二人で、こんどは自分たちが乗客となつて、駐車場から遠い旅に出発して行ったのである。④人の世の離合集散の掟の中に、自分の方から身を投じたのである。旅の途中のことは何一つ憶えていない。いきなり豊橋駅から両親の住む家に向う人力車の中のことになる。未知の町の夕暮の中を、私は祖母と相乗りで人力車に揺られていた。青白い街のガス燈の光が、濡れるような旅情で私と祖母を包んでいる。

私は現在でも、外国旅行の時など、自分の知らない町に、夕暮時にはいつて行くと、一種独特の淋しさを感じる。初めての町の夕暮時というものは淋しいものだと思う。今日、日本の場合は、どこも同じような性格の町になってしまつて、初めての町であっても、自分の知らない町といった思いはなくなつてしまつている。従つて、未知の町の夕暮の淋しさというものにも、めつたにぶつかることはない。この夕暮の淋しさというのは旅情に他ならないが、⑤今は外国旅行の時ぐらいにしか味わえそうもない。

豊橋の町の夕暮の中を、祖母と相乗りで人力車に揺られて行った思い出は、旅情の⑥エッセンスのようなものとして、今も心のどこかにeオンゾンされている。

生計のために忙しく立ち働いた一日は終り、人々は⑦おのがじし灯火を灯した己が埒に帰ろうとしている。そうした人の動きが、薄暮に包まれようとしている町を占領している。道路には一定の間隔で青白いガス燈が灯っている。そうした中を、私は初めて乗る不思議な乗物に揺られて通過して行ったのである。

この時味わつた旅情は、私の生涯においての最初のものであり、おそらく最も純粹で、最も烈しいものであつたろうと思う。六歳の私は、⑧体ごとすっぽりと旅情の現像液に投げ込まれている感じである。

私と祖母を乗せた人力車がいかなる家に向つたか、もちろん憶えていない。私と祖母が豊橋の家に何日滞在していたかも知らない。

もう一つ記憶に遺<sup>のこ</sup>っているのは、やはりガス燈のことである。脚榻<sup>きやたつ</sup>を持った男の人が街燈に灯を入れてゆくのを、高処<sup>たかみ</sup>から見降ろしていた記憶がある。おそらく家の二階から、そうした情景を眺め、やはり旅情を感じていたのであろうと思う。

この豊橋行きのことかどうかはつきりしないが、やはり夕暮時、大きい川の流れを見ていた記憶がある。何となく大川端とも言いいたい感じの場所で、川の岸には灯火の灯った何軒かの家が並んでいる。やはりここにあるものも旅情と言っていいたいものようである。豊橋の旅の往<sup>い</sup>きか、帰りに、沼津に一泊して、御成橋付近で、町中を流れている狩野川<sup>かの</sup>の流れでも眼にしたのではないかと思う。

ともあれ、最初の豊橋行きは、おかのお婆さんにとっては必死な陳情の旅であり、私にとっては専ら夕暮の中に幼い旅情を拾った旅であったようである。私は「しろばんば」というAの小説を持っているが、その作品では、この小学校へ上がる前の豊橋行きのことは取り上げていない。小説の形で綴るには余りにもBな印象しか持っていないからである。小学校二年生の時の豊橋行きの方は殆どそのままの形で「しろばんば」に綴っている。

注

1 伊豆市湯ヶ島。

2 責任をとるために切腹などで自死すること。

問一 二重傍線部 a、e について、漢字はその読みをひらがなで答え、カタカナは漢字に改め、楷書で正確に書きなさい。

問二 傍線部①、⑥、⑦について、本文中の意味として最も適当なものを、次の中からそれぞれ一つずつ選び、記号で答えなさい。

- ア あちらこちらに向いて  
イ 持てる技を繰り出して  
ウ あらゆる手段を試して  
エ ある限りの感情に訴えて  
オ すべての人の手を借りて
- ① 八方手をつくして





問八 空欄Aに入る語として最も適当なものを、次の中から選び、記号で書きなさい。

ア 日記風    イ ミステリ風    ウ 自伝風    エ ファンタジー風    オ 歴史小説風

問九 空欄Bに入る語を、本文中から漢字三文字で抜き出し、書きなさい。

問十 次に示すのは、この文章を読んだ高校生が考えを述べたものである。本文の内容に即した  
ものには○を、不適当なものには×を書きなさい。

ア 両親の住む豊橋へ向かう「私」の旅を通して、「私」と祖母の心の交流が確かなものとなっ  
ていく描写に胸を打たれた。祖母には辛く、「私」には新鮮で楽しい旅というギャップがとく  
に印象に残ったわ。

イ わたしも、この文章に出てくる「私」と同じように、初めての旅の印象は鮮烈にあるわ。  
必ずしも全部をはっきり覚えていくわけではなくきれぎれの記憶だけど、駐車場での淋しさ  
とか、夕暮に訪れる未知の町の旅情とか、共感ができたわ。

ウ おかのお婆さんに比べて両親の存在が希薄だったね。「私」のことより、自分たちの都合を  
優先させたうえ、子どもを「小憎らしく」思う両親が、祖母ばかりか「私」にまで裏切られ  
ていくストーリーに、親の悲哀や罪悪感を覚えた。

エ おかのお婆さんの陳情がはつきり書かれていないところがいい。自分がこれまで育てた  
「私」を手離したくはなかっただろうなと想像できる。ひたすら旅情を感じている「私」と  
は別の旅だったのだろうか。

オ 六歳にして早くも駐車場や駅の混雑に淋しさを覚えたり、別れや出会いに人生の哀歓を感  
じ取ったり、六歳の自分と、それを思い出している今の自分とを対比的に描き、筆者の卓越  
した美意識が溢れている文章だった。

(三) 次の文中の空欄にあてはまる最も適当な語句を、選択肢の中からそれぞれ一つずつ選び、記号で答えなさい。

- ① 明治初期に港町として栄えたこの地には、当時の( )な街並みが残っている。  
ア エキゾチック イ エスニック ウ パブリック エ ロマンチック
- ② 彼は野球部に入部するとたちまち頭角を( )、早くも一年生からレギュラー選手となった。  
ア 現し イ 示し ウ 出し エ 見せ
- ③ 人気絶頂だった彼の突然の引退は、ファンにとってはまさに( )であった。  
ア 一事が万事 イ 嘘も方便 ウ 青天の霹靂<sup>（きれき）</sup> エ 高嶺の花<sup>（たかね）</sup>
- ④ 一家は、戦乱から逃れるために、( )の思いで母国から脱出した。  
ア 困惑 イ 断腸 ウ 望郷 エ 憂愁
- ⑤ 首謀者の逮捕によって、警察は犯罪組織を一網打( )にすることができた。  
ア 撃 イ 算 ウ 尽 エ 倒
- ⑥ 相手の事情に耳を傾けてしまうと、情に( )さして冷静な判断ができなくなる。  
ア かたな イ さお ウ みず エ ゆび
- ⑦ 子ども祭りの役員か。ついに私にも( )がまわってきた。この秋は忙しいな。  
ア おかま イ おさら ウ おなべ エ おはち
- ⑧ 母は若いころ、国際線の客室乗務員だった。( )で、海外旅行でのコミュニケーション能力は今も万能だ。  
ア 蛍雪の功<sup>（けいせつ）</sup> イ 立つ鳥跡を濁さず ウ 三つ子の魂百まで エ 昔取った杵柄<sup>（きねづか）</sup>
- ⑨ 彼は子どもの頃から星に夢中で、毎晩天体観測を続けていた。その情熱が実を結び、今では天文学の立派な研究者だ。まさに「( )」だね。  
ア 終わりよければすべてよし イ 朱に交われば赤くなる  
ウ 好きこそもの上手なれ エ 一筋縄ではいかない
- ⑩ そんな( )な対応では、お客様は満足しません。  
ア いたずら イ おざなり ウ なおざり エ やみくも